1994. 11. 25

The Japan Academy of Midwifery Newsletter NO. 15

日本助産学会ニュースレター

発行所　日本助産学会
東京都千代田区富士見1-8-21
東京都助産婦会館内
〒102 電話03－3221－1020
FAX 03－3221－0417
代表者　近藤潤子

心ある人々と共に

葛飾赤十字病院
相原真弓

私は現在、幸いなことにジモンの世話人の一人として活動させていただいている。ジモンは、自主的な助産婦のネットワークで、詳細は助産婦雑誌1994年7月号をご参照いただきたい。ジモンの世話人は皆、「今のお産はおかしいぞ、助産婦も変だ。」という問題意識を持っている。今や、お産のあり方や助産婦の働き方は、私たち専門職の間だけで議論すべき問題ではなくなっている。当然、産む人たちとも話し合いが必要だ。産む人たちの中には、産む性の女性だけでなく、産む時期の女性だけでなく、多くの人々が含まれる。現在、「おまかせするお産」から脱却し自分たちで「選べるお産」を目指す母親たちのグループが全国各地にできている。彼女たちの活動は筋が通っていて、エネルギッシュだ。それだけに、専門職を見る目も厳しい。ジモンの学習会で、助産婦教育の改革を話し合った時、母親たちの代表から次のような発言があった。「改革の動きが、助産婦の質の低下につながるならば、許さない。」私たち助産婦が、彼女たちとも手を結べば、お産の変化助産婦の変化が、社会現象となって進むだろう。だから、ジモンでは助産婦相互の交流をはかると同時に、母親やその他の人たちとも交流している。

助産婦の変化の糸口を考えてみる。現在、助産婦のほとんどは、病産院などの施設に勤務している。勤務助産婦の抱える課題を解決し、仕事のやりがいを見い出すことは、勤務する施設を変える位では行えない。それは、施設と施設、施設と学校、学校と社会等が相互に関連しているからだ。助産婦らしく働きたいと望み努力する助産婦が、教員として大学や助産婦学校に招かれても、力をつけて開業しても、助産婦が主体的に働いていると評判の施設に移っても、なかなか助産婦らしく働けない。昨夜、職場の同僚と語っていて、的を得た言葉に出会った。「ここで文句を言っている人が、あそこでうまくいくはずがない。」全くその通りである。この辺で助産婦の現状をじっくり見据え、共に考えてみたい。

例えば、助産婦教育。私個人は、助産婦教育を短い期間で行うべきではないと考えている。その意味で、現行の四年制大学のぎゅうぎゅうのカリキュラム内で教育を受けた学生も、助産婦の国家試験の受験資格を取得できることに疑問を抱いている。学歴社会の日本で、看護や助産が立ち遅れているという劣等感をぬぐいさって、もっと根本的な議論がしたい。というのは、看護教育の中で短期間助産を学んでも、助産婦の力は育ちにくいからだ。現状では、生理的な現象であるお産を、「助産婦の眼」で診られない助産婦が育つ。ほとんどのお産は、対象の持つ力で正常に経過するが、短期間の教育を受けた助産婦はそれを信じて見守ることができない。そして、いつも「何かあったらどうしよう」と脅えてしまう。しかも、出生数の減少する中、学生の実習施設が少ないため、分娩介助の件数を10例以下でもよいという動きさえある。一年コースの助産婦学校で学び、10例の分娩介助を行って卒業した私自身、10例では不十分だと感じている。だから、助産婦の教育期間は一年以上にし、分娩介助件数も10例以上にすべきだ。これを、アカデミックな大学で、

じっくり時間をかけて行いたいというならば理解できる。正常なお産の介助をし、育児の援助ができる本来の助産婦を育てるために、どの位の教育期間が適切で、何例の分娩介助を、どこで経験させるべきかという議論がしたい。

専門職は自分たちの教育について考え続けるべきだ。免許を持って、生活に事欠かない賃金を貰っているから、今さら学生の教育なんてと考えていないか。助産婦職の存続さえ危ぶまれる時代なのだ。社会の中で、助産婦がどのように位置づけられ、何を期待されているかを認識したい。現状を嘆かず、心ある人々と共に。

海外で働く助産婦

カンボジアからの便り

第二報（8月号）

柴　山　晴　美

皆さん、お元気でしょうか。前回のカンボジア通信を送らせてもらって、随分とたってしまいました。今年の日本の夏は、並ならぬ暑さだとの事。こちらは、強い雨が降りはじめ、本格的な雨季に入ってきました。今月中旬ぐらいまでは、あまり雨は降らなかったのですが、メコン川の水はどんどん増水していき（多分、上流でかなり雨が降ったのでしょう）このままでは、クサイカンダールが水びたしになると思ったのですが、水は少し引き気味です。不思議なものです。

私も、もうカンボジアで9カ月を過ごしました。今は主に何をしているかという話しの前に、*SHAREの活動地について、少し紹介しておきましょう。カンダール県クサイカンダール郡というところがSHAREの活動地で、カンダール県はプノンペン特別区のまわりを、取り巻くように位置しています。プノンペンから、そのクサイカンダール郡の郡病院までバイク又は車で約1時間半かかります。クサイカンダール郡は18のクム（集合村）にわかれていて、人口約9万人、中心のクムに郡病院が、残りのクムに副病院と、16のヘルスセンターがあります。郡病院のスタッフは計25人で、各クムのヘルスセンターには、だいたい2人の有給スタッフがいて（1人は看護士、1人は助産婦という組み合わせが多い）、その人達に加え無給スタッフとヘルスエデュケーターと呼ばれる人達がいます。

今、私自身は主に2つのトレーニングに関わっています。1つは、クサイカンダール郡のヘルススタッフが、SHAREのタイの活動地に行き、タイのプライマリーヘルスケアーを学ぶという計画が2年前からあって、その第1陣12人が9月に3週間、東北タイへ行きます。私は、タイでの研修を受けるにあたってのカンボジア側での準備を今までやってきて、タイへも一緒に行く予定になっています。もう1つは村のヘルスセンターの助産婦さん達の郡病院における技術トレーニングです。

今回は、村での母子保健活動と助産婦さん達へのトレーニングについて、少し話しをしてみたいと思います。クサイカンダールでの施設分娩は郡病院のみで、村の中では助産婦さんや伝統産婆さんと呼ばれる人々が家でのお産を手伝っています。今回のトレーニングは、この助産婦さん達に郡病院に来てもらい（1グループ3人）6日間泊まり込みで、外来・分娩介助の実習と、毎日午後は、郡病院のアシスタントドクターと助産婦さんより、妊娠・分娩・分娩後についての講義が行われています。7月から9月の間に8グループ、計24人の助産婦さんにトレーニングが行われる予定です。郡のスタッフは良くがんばっていて助産婦さん達に好評です。私は、このトレーニングに関わる中でいろいろな事を学ばせてもらっています。骨盤位や妊娠中毒症のお産にも郡病院のスタッフはしっかり対応していて、日本では色々な治療や予防措置が行われるであろうケースが、ここまでがんばれるものなんだと驚かせられます。手術の設備もなく、薬も不足していて、消毒・清潔操作

も十分とは言えない中、技と頭とある物で対応しています。もちろん、どうしても郡病院では対応できないケースはプノンペンへ行くよう家族・本人へ説明されます。プノンペンに行くように言われて、支払いの可能な人達はプノンペンにいきますが、お金の工面できない人は郡病院にとどまるか、村に帰るケースもあります。時折、村人のどうにもならない最終判断をみると、こちらも辛くなります。トレーニング中の講義では、生徒が少ないので、先生と対話する形で1日約2時間の講義が行われていて、村や郡病院での具体的な話しが出されて、おもしろい話しがとびかいます。ある貧しい村から来た助産婦さんが2日まるまるかかったお産でもらったお礼が200リエル（9円ぐらい。お礼にも幅があって、5000リエルぐらいが上限）だったとか、47才で12人目の妊娠中、現在妊娠7カ月半、妊娠中毒症の症状があるけれど、健康教育には耳をかさない女性がいるがどうすればいいだろうか等……。

今回は助産婦さんの活動の話しが中心になりましたが、まだまだこれは一部。続は、またの機会ということで……。

▼柴山　晴美

1990年に日本赤十字看護大学を卒業し、3年間武蔵野赤十字病院で助産婦として勤務しました。その後80日間ベビーヘルシー美蕾（瀬井助産所）で研修をして、1993年6月下旬に国際保健協力市民の会の派遣でタイに渡り、クメール語の研修を受けてカンボジアに赴任しました。カンボジアから8月に第2報が届きました。

住所：P.O.Box 127 SHARE Phhom Penh
Phhom Penh CAMBODIA

＊SHARE国際保健協力市民の会東京事務所
〒132 東京都江戸川区東小松川3－35－13
ニックハイム船堀205
TEL 03(5607)4775　FAX.03(5607)4776

SHARE OFFICE
3-35-13-205, Higashikomatsugawa,
Edogawa, Tokyo. 132 JAPAN

◈ＩＣＭからのお知らせ

第４回ＩＣＭアジア太平洋地域会議の開催

開催主旨：ＩＣＭは世界を４地域に区分している。「各地域内の国々には共通性も大きく、諸問題の相互理解を深め、討議することにより、助産、母子保健の向上に有益である」との観点から、３年毎ＩＣＭ大会の中間に各地域で地域会議を開催している。
アジア太平洋地域会議は、第１回－インドネシア、第２回－香港、第３回－オーストラリア、と主として地域代表のいる国で行なわれてきた。今回日本で行なうのは、「①長らく地域代表を務め、地域内の先進国として期待されており、神戸大会の実績もある。オーストラリアはシドニー大会と地域会議の両方をすでに開催している。②大規模なＯＤＡを行なっている中で、近隣、特に発展途上国の状況を日本の助産婦が知り、顔のある援助へつなげる機会と成しうる。」ためである。

基本方針：実務会議ではなく、各国の助産の現状報告と特徴、問題点の討議を中心とした専門会議とする。
アジア太平洋地域のＩＣＭ加盟国だけでなく、特に発展途上国のＩＣＭへの加盟を促すため。非加盟国の代表も招聘する（当地域にも外貨保有高の少ない発展途上国が多く、ＩＣＭの会費納入にも差し支えるため、未加盟の国々が多い現状にある）。経費は極力抑え、登録料で賄える範囲とする。但し、途上国からの参加については経費を

援助したい（日本も戦後加盟した時は恩典を受けている。途上国からの助産婦の招聘については、ＩＣＭ大会はスポンサー・ア・ミッドワイフ・プログラムにより、また地域会議は主催国が工面し、参加のための資金援助が図られている）。

テ　ー　マ：助産婦活動の原点（The Core of Midwifery Practice）（案）
期　　日：1995年6月7日(水)～8日(木)／9日（海外参加者のみ）
期　　間：3日間
　　1日、2日目／専門会議
　　3日目／施設見学（海外参加者のみ）
会　　場：国立婦人教育会館（埼玉県、嵐山町）
定　　員：7～8日／600名（推定／国内550名、海外50名）、9日（海外のみ）
参 加 国：ＩＣＭ加盟協会／オーストラリア、*インドネシア、日本、香港、韓国、ニュージー
　　（10か国）　　ランド、*フィリピン、サラワク、スリランカ、台湾
尚、参加などの詳細については、次の第16号ニュースレターにて御案内致します。

第7回日本助産学会ワークショップ報告

学術振興担当理事　竹　内　美恵子

上記のワークショップは、助産学の研究の支援を図るため、東京3回、神戸、九州、四国で順次開催し、第7回は北海道での開催となった。本年度は、平成6年8月27日(土)に札幌医科大学保健医療学部で、「助産学研究の実際」をメーンテーマとして実施した。

基調講演は、近藤潤子理事長（札幌医科大学保健医療学部部長）が助産学研究の動向を通して、今後の研究の方向性を示された。ワーキンググループは、下記の研究テーマ毎に編成し、研究課題の設定にはじまり研究過程等について討議した。なお、本年度は、ワーキンググループに「研究の基礎」を追加したが、参加者の関心が最も高いテーマであった。

ワークショップの結果は、2つのグループが設定された研究課題を継続的に研究することを決定し、他の3つのグループでは、研究目標を設定を行うとともに、今後の研究の方向づけについて決定した。参加者は、23名の北海道地区を中心にした学会員であったが、今後の研究活動の発展を期待できる活発な討議が行われた。なお、本年度は、33名の参加申し込みを頂いたが、10名は参加資格を持たなかった。参加資格、開催の周知等につき、改めて検討したいと考えている。

さて、第7回までのワークショップの参加者は、172名であった。うち、138名は臨床で活動する会員であった。実践の場で、日々の直感を無意識のものに葬るのではなく、意識された問題意識に導き、判断を研究成果に基づく事実によって磨きをかけることは重要である。実際、助産実践と助産学研究との関係が緊密になればそれだけ研究は良いものになり、実践が良いものになる。このことから、実践の場での助産婦の研究に貢献するための支援方法として、身近な場所でいつでも研究支援が受けられるべく方策を検討する必要があると思われる。

最後に、本ワークショップの運営には、天使女子短期大学、和田サヨ子先生、札幌医科大学保健医療学部丸山知子先生をはじめ看護学科の諸先生方、事務局の皆様に格別のご厚情を頂いたことを報告する。

記

ワークショップ・プログラム　・全体テーマ　「助産学研究の実際」
▼基調講演　　日本助産学会理事長　近藤　潤子

▼ワークショップ

領域：1. 助産学研究の基礎　コーディネーター：聖路加看護大学助教授　森　明子

2. レビューを用いた産婦の研究
コーディネーター：天使女子短期大学部教授　和田サヨ子

3. 母性心理学研究領域　不妊問題を抱えた人々の心理
コーディネーター：高知女子大学助教授　岸田　佐智

4. 思春期における研究　思春期母性の発達急機
コーディネーター：神戸大学医学部附属病院看護部長　新道　幸恵

5. 助産研究領域　産痛の測定用具と尺度に関する研究
コーディネーター：徳島大学医療短期大学部助教授　竹内美恵子

◆◆母子保健・助産婦に関連する諸般の動向◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

1. 厚生省健康政策局看護課において、平成6年4月に「少子・高齢社会看護問題検討会」が発足し、年内に成案を得ることを目標に下記の構成委員で検討が進められている。

（資料）――― 少子・高齢社会看護問題検討会 ―――

平成　6　年　4　月
厚生省健康政策局看護課

1. 目　的

(1) 現在の少子・高齢社会における看護は、その内容の広がり、専門性の深まり、患者の自立促進などにより従来と比べて大きな変容を迫られている。

内容面では、訪問看護の拡大や在宅ケアの強化、慢性疾患の予防、福祉との連携などが求められていること。

専門性の深まりでは、医療の高度・複雑化に伴う医療チーム拡大の中で、看護者として自立した予測・判断力、他職種との調整・連携能力を求められていること。

そして、患者や家族の人権意識の高まりに配慮し、患者の自立に向けた行動を支援する能力が必要とされていることである。

(2) このような看護の変化に対応して、少子・高齢社会の看護はいかにあるべきかを探り、必要とされる看護を予測し、看護マンパワーの資質や養成のあり方、関連職種間の役割分担を明らかにし、今後の施策の推進方策を検討することを目的とする。

2. 位置づけ

(1) 本検討会は、医療関係者審議会保健婦助産婦看護婦部会のもとに開催するものとする。

(2) 本検討会の結論は、同部会に報告され、了承されれば審議会の意見とされるものとする。

(3) 事務局は、健康政策局看護課に置くものとする。

3. 検討会メンバー

少子・高齢社会看護問題検討会委員名簿（◎印は座長、○印は座長代理）

◎伊　藤　光　晴	京都大学経済学部名誉教授
○川　村　佐和子	東京医科歯科大学医学部教授
行　天　良　雄	医事評論家
坂　上　正　道	北里大学客員教授
下　村　　健	健康保険組合連合会副会長
竹　中　浩　治	厚生年金事業振興団常務理事
橋　本　泰　子	公共弘済園ケアセンター所長

羽田澄子	映画監督
平山朝子	千葉大学看護学部長
南　裕子	兵庫県立看護大学長

4. 検討期間
平成6年4月に着手し、年内に成案を得ることとする。

2. 文部省高等教育局において、平成6年7月に「大学・短期大学における看護教育の改善に関する調査研究協力者会議」が発足した。目的は、看護系大学・短期大学に適用される保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則について、看護教育の発展・向上に資するため、既に大綱が行われた大学院設置基準・短期大学設置基準の趣旨を踏まえ、その弾力化について検討を行うことである。実施期間は平成6年9月から平成7年3月31日までで、調査研究を行う構成員は下記の通りである。

平山朝子	千葉大学看護学部長
矢野正子	東京大学医学部教授
樋口康子	日本赤十字看護大学副学長
小島操子	聖路加看護大学看護学部長
土屋　純	群馬大学医療技術短期大学部部長
沢　禮子	聖母女子短期大学長
三木吉治	愛媛大学長
藤枝知子	東京女子医科大学附属病院看護部長
見藤隆子	(社) 日本看護協会会長
坂上正道	(社) 日本医師会副会長

3. 厚生省児童家庭局母子保健課に母子保健専門官が就任する。
平成6年10月1日付で、岩澤和子氏が厚生省児童家庭局の母子保健専門官として就任された。待望の母子の専門職として母子保健課での活動を期待したい。

4. 厚生省健康政策局看護課助産婦係長の楠本万里子氏は、看護教育指導官の役職を得られた。

5. 日本助産学会において「将来の助産婦のありかた検討委員会」が発足した。
本年度の総会に於いて、会場より大学協議会でCNS検討や日本看護協会で専門看護婦(士)認定の検討が行われているので、日本助産学会において助産婦の認定制度の検討をして戴きたいとの発言があった。理事長は前向きに発言を受けとめ、7月の第2回理事会で検討の上9月に委員会が発足した。

委員会の構成メンバー

委員長	松岡　恵	(東京医科歯科大学)
委員	岩澤和子	(元国立公衆衛生院)
〃	江角二三子	(深谷赤十字病院)
〃	園生陽子	(聖母女子短期大学)
〃	高橋弘子	(厚生省看護研修研究センター)
〃	堀内成子	(聖路加看護大学)
コーデネイター	平澤美恵子	(広報担当理事、日本赤十字看護大学)

第９回日本助産学会学術集会開催のお知らせ

第９回日本助産学会学術集会をメインテーマ「地域保健を担う助産婦」のもとに，下記のとおり開催いたします。多数の皆様の参加をお待ちしております。

会 長 佐々木 敦 子

１．期　日　1995年3月21日（火曜日・春分の日）9:30～17:30
２．会　場　ホテルブエナビスタ
　　松本市本庄１－２－１（TEL 0263-37-0111）
３．プログラム
＊会長講演：「地域保健を担う助産婦像」
　演　者　佐々木 敦 子　信州大学医療技術短期大学部
　座　長　三 井 政 子　岐阜大学医療技術短期大学部
＊一般演題：口演，示説
＊日本助産学会総会
＊シンポジウム：「地域母子保健の活性化に向けて」
　座　長　平 澤 美恵子　日本赤十字看護大学
　　柳 沢 節 子　信州大学医療技術短期大学部
　演　者　堤 マ サ エ　山梨女子短期大学
　　松 岡 恵　東京医科歯科大学保健衛生学科
　　朝比奈 順 子　お産&子育てを支える会
　　中 村 晶 子　松本市役所市民健康課

終了後，同ホテル内において懇親会をいたします。是非ご参加ください。18:00～20:00

４．学術集会参加・懇親会参加・昼食希望について
1）参 加 費
学術集会参加費は８，０００円（1995年1月20日以降は９，０００円）
懇親会参加費は　８，０００円
2）学術集会参加・懇親会の参加申し込み方法
参加を希望される方は、参加費を下記に振り込んでください。会員以外の方のお申し込みも歓迎いたします。
郵便振替用紙は，１人で１枚を使用して申し込んでください。

学術集会参加費・懇親会参加費・昼食代の振り込み先

郵便振替口座	００５００－４－２４１４０
口 座 名 称	第９回日本助産学会学術集会

参加申し込みをされた方には，学術集会の討議を円滑にするために「集録」を事前にお送りする予定です。２月２０日以降に振り込みをされた方は，振り込みの確認ができないことがありますので，振り込み票を持参してください。
なお，宿泊ホテル，航空券，ＪＲ座席指定券等のご希望の方は早めにお申し込みください。ご案内をお送りいたします。

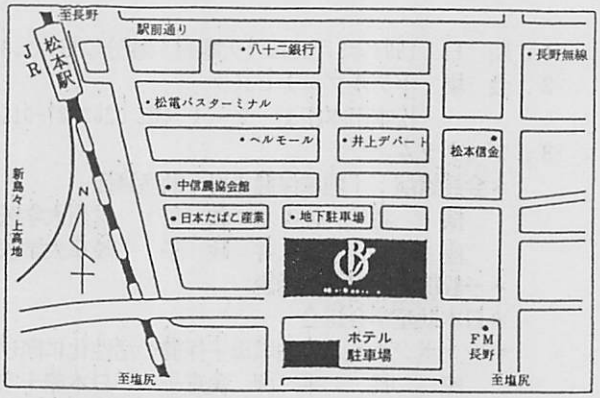
年会費の申し込みは別です。お間違いのないようにお願いします。

3)　昼食申し込み
昼食用弁当をご希望の方は，あらかじめ学術集会参加費と同時に申し込んでください。１食２，５００円，昼食券は事前にお渡ししますので，当日その昼食券と弁当をお引き換えください。

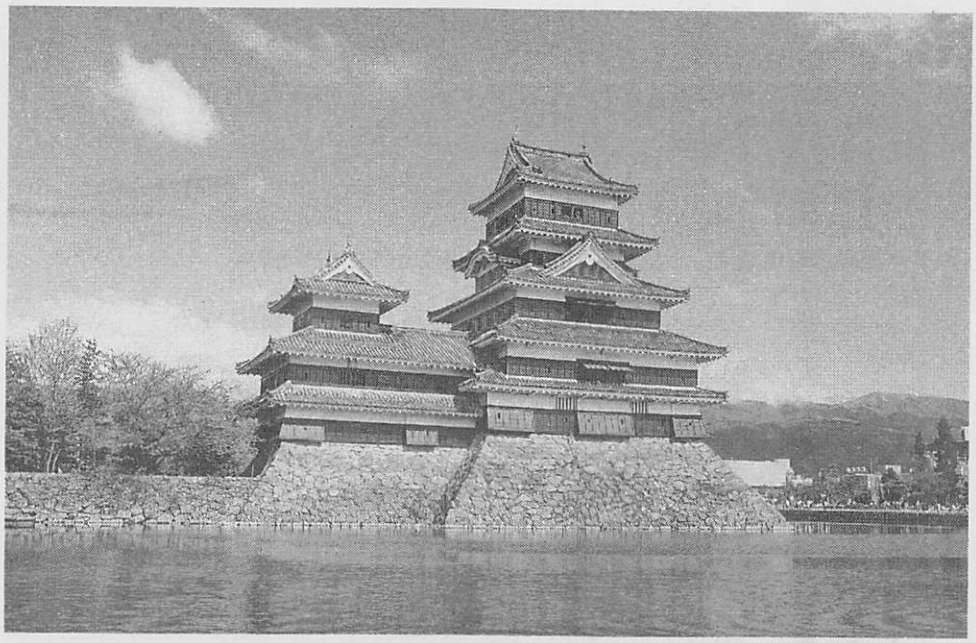
5．会場への案内

ホテル　ブエナビスタ
松本市本庄１丁目２番１号〒390
TEL0263(37)0111 FAX0263(37)0666

鉄　道ー中央本線、篠ノ井線、大糸線、松本電鉄上高地線、松本駅下車　徒歩５分。
バ　スー松本電鉄バスターミナル下車　徒歩５分。
お　車ー中央高速長野道松本Ｉ.Ｃ.でお降りください。
飛行機ー松本空港からはバスにて(約25分)松本バスターミナルにお越しいただけます。



6．連絡先
第９回日本助産学会学術集会事務局
〒390 長野県松本市旭３－１－１
信州大学医療技術短期大学部専攻科
TEL　0263-35-4600(内線3581・3582)
FAX　0263-32-6023



松　本　城

第9回日本助産学会プレコングレス・ミーティング

主催：よいお産を考える会　代表：堀内　成子
　　お産の学校　　代表：杉山　次子

メインテーマ：接点への探訪

－産婦の希望・助産婦の希望－

クオリティ・オブ・ライフが人々の生活の中で大きな位置を占めるようになり、出産体験も無事に、安全にというだけでなく、その質が問われだしてきました。

ケアの利用者である産婦からさまざまな希望が出されるようになってきました。痛くないお産をしたい、家族と一緒に記念になるような体験をしたい、副作用のある薬を使いたくない、胎盤を持って帰りたい、さまざまな産婦の希望があります。

一方、ケアを提供する助産婦にとって、家族中心ケアは理想的でも、システムの規模が大きくなるほどきまりは多くなり、融通性は縮小されてきます。従来の専門的知識から考えて、希望に添えないこともあります。日々の実践の中で、産婦と助産婦とは互いの接点をどのようにして見いだしているのでしょうか。

松本での第9回日本助産学会の前夜に、プレコングレス・ミーティングを企画いたしました。「接点への探訪－産婦の希望・助産婦の希望－」をメインテーマとして、話題提供者からの報告に引き続き、グループでのフリートーキングをもちたいと思います。

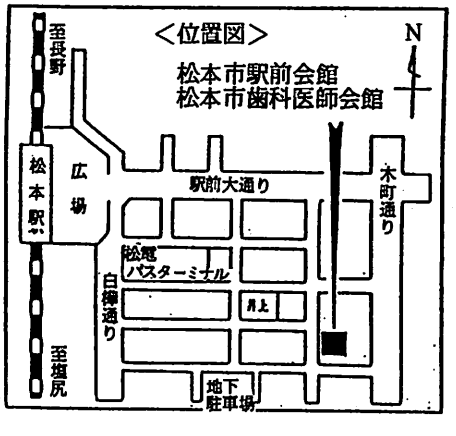
なごやかな雰囲気の中で、しかし白熱した討議をかわして学会の前夜に知的・体験的交流をしようではありませんか。たくさんの方々の参加をお待ち申し上げます。

と　　き：1995年3月20日(月) 午後6時から午後9時まで

と　こ　ろ：松本市駅前会館　（松本市深志2－3－21　℡：0263－33－2966）

申し込み方法：3000円（会場費・軽食代金を含む）を下記へお振込みください。
　　郵便振込先：00190－7－710541　「よいお産を考える会」

問い合わせ先：FAXか、ハガキでお問い合わせください。
　　〒104東京都中央区明石町10－1
　　聖路加看護大学　母性看護研究室
　　堀内　成子宛
　　FAX：03－5565－1626



会員からのお便り

第８回日本助産学会は大変盛会で、関係の方々に心より感謝いたします。

第３会場のビデオセッションで、病院勤務の方よりご質問があり、「子宮口が全開大しているのにいきみたくないという産婦がいる。Drは急げというが、どうしたらよいか」という内容でした。私が「そったくどうじ」という仏教用語を使ってご説明いたしましたところ、後で数名の方より問い合わせがありましたので、紙上でお答えいたします。

漢字は「卒琢同時」と書きます。これは、鶴の雛がかえる時に穀の内から嘴でつつくとそれを母鳥が感じて、さあおいでと外から穀をつつき穀が割れて雛がかえるということで、親子の絆や求めに応じて援助することが教育効果につながるという教えに使われます。

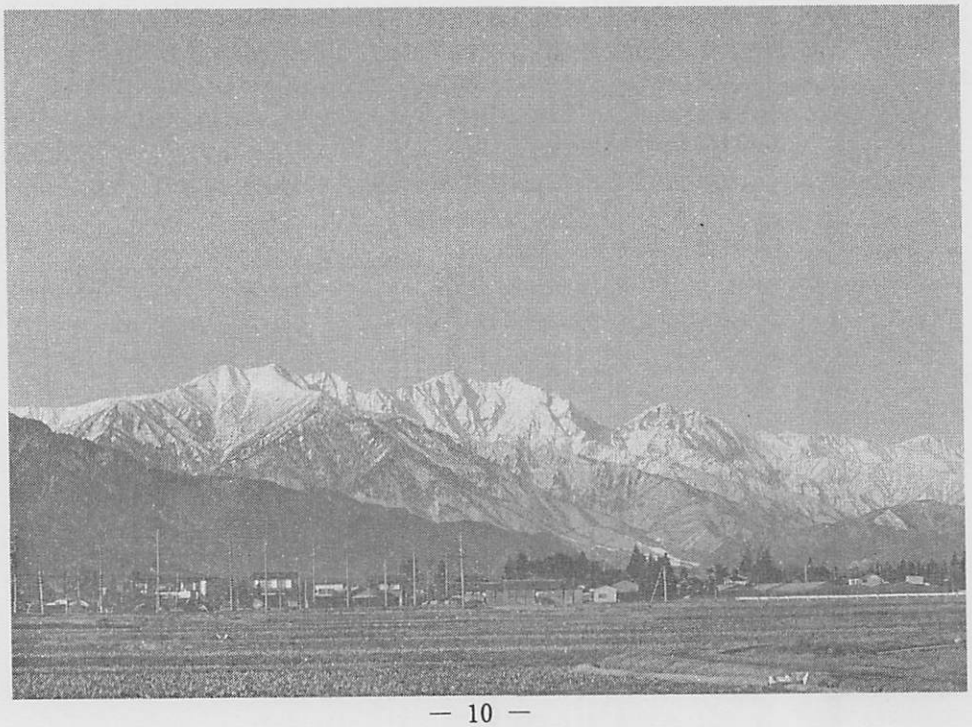
医学的にも陣痛によって娩出される時は、児の肺血管が拡張し、肺液の吸収がよいため呼吸がうまくいくことになり、無理な力を加えない方がよい結果が得られます。

なお、排臨近い時は、温かい手を当てるなど、冷やさない注意がいります。

福岡県　むなかた助産院
賀久　はつ

事務局だより

＊日本助産学会でも認定制度を考える委員会が発足し、母子保健を担う助産婦の継続教育のありかたが前向きに検討されはじめました。

＊第９回の日本助産学会学術集会は、「地域保健を担う助産婦」をめざし佐々木会長の元で着々と準備が進められております。

早春の信州を楽しみながら、実りある学会となるよう大勢の方々の参加を期待しております。